

# 中世文学資料解題③

## 星瑞穂

はじめに

本稿は『北の丸』五三号（令和三年）掲載の「中世文学資料解題②」に続くものである。当館所蔵の資料のうち、鎌倉時代～室町時代にかけて成立した文学作品（中世文学）及び後世に成立したその注釈書類の書誌解題である。広く一般の利用に供するため、作品解説を加えて掲載する。

今回は『改訂 内閣文庫国書分類目録』の「国文」の項目に挙げられている資料から、該当の資料を抽出して調査した。旧蔵者は紅葉山文庫・昌平坂学問所・和学講談所など多岐に及ぶが、近世初期に出版された注釈書も多く含み、中世文学の享受の実態をうかがうことができる。

なお、挿絵を伴う資料については、すでに『北の丸』四五号（平成二五年）～五〇号（平成三〇年）に「当館所蔵の「絵入り本」解題①～⑥」として紹介しているので参照されたい。

【八〇】参考太平記 元禄四年刊 四一冊

内藤風虎旧蔵 「請求番号：一六七・〇〇七五」

本資料は前号掲載資料『参考太平記』（七八）の同版本で、磐城平藩主内藤風虎（義概、義泰）の旧蔵書である。全四一巻四一冊。

内藤風虎は和歌を後水尾天皇・中院通村・烏丸光広らに学び、特に俳諧を能くして宗因・季吟らと交流、近世前期の文字サロンを形成した。蔵書家として知られ、その旧蔵書には「牘庫」の印がある。本資料には第三冊目から第四一冊目の一丁目右下に押印が見える。なお各冊一丁目右上には花押型の朱印あり。風虎以前の旧蔵者のものか。前掲資料同様、本資料は第一冊目の遊紙に封面がある。封面には、版元の印と魁星印あり。

第三四冊目から第三九冊目は題簽右下に方形朱印（判読不能）あり。

【書誌】

外題・①②「参考太平記 目録（一）」左肩無地料紙題簽に墨書（一九・五×三・八糎）、③～④「参考太平記 三（～四十）」左肩四周双辺題簽（一九・五糎×三・八糎）※②はほぼ脱落

内題・「参考太平記」

表紙・代赭色雷文繫艶出表紙（二七・五糎×一九・〇糎）

遊紙・①封面「江府書肆 松雲齋（印）」／参考太平記／京師書堂柳

枝軒（印）」

料紙・楮紙

行数・①每半葉八行、②～④每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・①四周双辺（二一・〇糎×一五・〇糎）、有界、②～④四周双

辺(二一・〇糶×一五・〇糶、無界)

墨付丁数・①四七丁、②六〇丁、③七九丁、④五九丁、⑤五一丁、⑥四五丁、⑦四五丁、⑧二〇四丁、⑨六四丁、⑩八二丁、⑪七二丁、⑫五一丁、⑬七八丁、⑭七六丁、⑮九六丁、⑯六九丁、⑰二二五丁、⑱一〇五丁、⑲七三丁、⑳五四丁、㉑五三丁、㉒八〇丁、㉓三六丁、㉔三三丁、㉕六二丁、㉖五一丁、㉗七二丁、㉘五四丁、㉙三四丁、㉚六七丁、㉛七〇丁、㉜六四丁、㉝八二丁、㉞六五丁、㉟四九丁、㊱五六丁、㊲五〇丁、㊳二四丁、㊴四八丁、㊵九〇丁、㊶二三丁  
印記・①～④一才「大日本帝国図書印」「太政官文庫」(花押型朱印)、③～④一才「牘庫」、各冊末尾「大日本帝国図書印」

【刊年・刊行者】

④二三ウに刊記あり。四周単辺(一四・五糶×五・五糶)の枠内。  
「武江書肆富野治左衛門勝武」/元禄四辛未年二月廿五日 寿梓/京兆書林茨城多左衛門方道」

【八一】参考太平記 元禄四年刊 四一冊

文部省旧蔵 「請求番号：一六七・〇〇七三」

本資料は前号掲載資料『参考太平記』(七八)の同版本で、文部省の旧蔵書である。全四一巻四一冊。

各冊第一丁目に「文部省書庫」の朱印が捺されている。前掲資料同様、本資料は第一冊目の遊紙に封面がある。封面には、版元の印と魁星印あり。

第二四冊目と第四一冊目の裏表紙が取り換えられており、横刷毛目表紙

になっている。

【書誌】

外題・①～④「参考太平記 首巻(四十止)」左肩四周双辺刷題簽(一九・四糶×三・七糶) ※①は虫損

内題・「参考太平記」

表紙・代赭色雷文繁艶出表紙(二七・二糶×一九・〇糶)

遊紙・①封面「江府書肆 松雲齋(印)」/参考太平記/京師書堂柳枝軒(印)

料紙・楮紙

行数・①每半葉八行、②～④每半葉九行

字面高さ・二一・〇糶

匡郭・①四周双辺(二一・〇糶×一五・〇糶)、有界、②～④四周双辺(二一・〇糶×一五・〇糶、無界)

墨付丁数・①四六丁、②五九丁、③七九丁、④五九丁、⑤五一丁、⑥四五丁、⑦四五丁、⑧一〇四丁、⑨六四丁、⑩八二丁、⑪七二丁、⑫五一丁、⑬七八丁、⑭七六丁、⑮九六丁、⑯六九丁、⑰二二五丁、⑱一〇五丁、⑲七三丁、⑳五四丁、㉑五三丁、㉒八〇丁、㉓三六丁、㉔三三丁、㉕六二丁、㉖五一丁、㉗七二丁、㉘五四丁、㉙三四丁、㉚六七丁、㉛七〇丁、㉜六四丁、㉝八二丁、㉞六五丁、㉟四九丁、㊱五六丁、㊲五〇丁、㊳二四丁、㊴四八丁、㊵九〇丁、㊶二三丁  
印記・①一才「文部省書庫」「太政官文庫」「日本政府図書」、③～④二才「太政官文庫」、各冊末尾「太政官文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

④二三ウに刊記あり。四周単辺(一四・五糶×五・五糶)の枠内。  
「武江書肆富野治左衛門勝武」/元禄四辛未年二月廿五日 寿梓/京

兆書林茨城多左衛門方道」

【八二】参考太平記 元禄四年刊 四二冊

教部省旧蔵 「請求番号：一六七・〇〇七四」

本資料は前号掲載資料（七八）『参考太平記』の同版本で、教部省の旧蔵書である。全四一巻四一冊。

各冊第一丁目に「神祇官文庫印」「宣教使」「教部省文庫印」が見える。前掲資料と大きく異なる点は、封面を欠いていること。表紙は代赭色だが無地の料紙を用いており、改装された際に封面が欠けたものと類推される。大きさが一回りほど小さいのも、改装の影響か。

【書誌】

外題・①④「参考太平記 首巻（四十止）」左肩四周双边刷題簽

（一九・四糶×三・七糶）

内題・「参考太平記」

表紙・代赭色表紙（二四・七糶×一八・〇糶）

料紙・楮紙

行数・①每半葉八行、②④每半葉九行

字面高さ・二一・〇糶

匡郭・①四周双边（二一・〇糶×一五・〇糶）、有界、②④四周双边

（二一・〇糶×一五・〇糶）、無界

墨付丁数・①四六丁、②五九丁、③七九丁、④五九丁、⑤五一丁、⑥四五丁、⑦四五丁、⑧一〇四丁、⑨六四丁、⑩八二丁、⑪七二丁、⑫五一丁、⑬七八丁、⑭七六丁、⑮九六丁、⑯六九丁、⑰一二五丁、⑱

一〇五丁、<sup>19</sup>七三丁、<sup>20</sup>五四丁、<sup>21</sup>五三丁、<sup>22</sup>八〇丁、<sup>23</sup>三六丁、<sup>24</sup>三二丁、<sup>25</sup>六二丁、<sup>26</sup>五一丁、<sup>27</sup>七二丁、<sup>28</sup>五四丁、<sup>29</sup>三四丁、<sup>30</sup>六七丁、<sup>31</sup>七〇丁、<sup>32</sup>六四丁、<sup>33</sup>八二丁、<sup>34</sup>六五丁、<sup>35</sup>四九丁、<sup>36</sup>五六丁、<sup>37</sup>五〇丁、<sup>38</sup>二四丁、<sup>39</sup>四八丁、<sup>40</sup>九〇丁、<sup>41</sup>三三丁  
印記・各冊一才「神祇官文庫」「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」  
「太政官文庫」「日本政府図書」、各冊末尾「図書局文庫」  
「太政官文庫」

【刊年・刊行者】

④「二三ウに刊記あり。四周单边（一四・五糶×五・五糶）の枠内。  
「武江書肆富野治左衛門勝武／元禄四辛未年二月廿五日 寿梓／京兆書林茨城多左衛門方道」

【八三】参考太平記 正徳三年刊 四一冊

太政官正院地志課・地理寮地誌課・内務省地理局旧蔵

「請求番号：一六七・〇〇七六」

本資料は前号掲載資料『参考太平記』（七八）の後刷で、正徳三年の刊記を持つ。四〇巻四一冊。

①遊紙部分に封面あり。版面は元禄版と同じだが、墨色がより濃く出ている。魁星印あり。

【書誌】

外題・①④「参考太平記 首巻（四十止）」左肩四周双边刷題簽（一九・〇糶×三・五糶）  
内題・「参考太平記」

表紙・紺色表紙（二七・〇糎×一八・〇糎）

料紙・楮紙

行数・①每半葉八行、②～④每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・①四周双边（二一・五糎×一五・〇三）、有界、②～④四周双边（二一・〇糎×一五・〇糎）、無界

墨付丁数・①四六丁、②五九丁、③七九丁、④五九丁、⑤五一丁、⑥四五丁、⑦四五丁、⑧一〇四丁、⑨六四丁、⑩八二丁、⑪七一丁、⑫五一丁、⑬七八丁、⑭七六丁、⑮九六丁、⑯六九丁、⑰一二五丁、⑱一〇五丁、⑲七三丁、⑳五四丁、㉑五三丁、㉒八〇丁、㉓三六丁、㉔三三丁、㉕六二丁、㉖五一丁、㉗七二丁、㉘五四丁、㉙三四丁、㉚六七丁、㉛七〇丁、㉜六四丁、㉝八二丁、㉞六五丁、㉟四九丁、㊱五六丁、㊲五〇丁、㊳二四丁、㊴四八丁、㊵九〇丁、㊶二四丁

印記・①一才「地誌備用図籍之記」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

④二三ウに元の刊記あり。四周单边（二四・五糎×五・五糎）の枠内。

「武江書肆富野治左衛門勝武／元禄四辛未年二月廿五日 寿梓／京兆書林茨城多左衛門方道」

二四才からは「彰考館訂本刊行目録／洛陽 柳枝軒方道藏板」として、四周单边（一八・三糎×一三・四糎）の枠内に目録を載せる。每半葉一〇行。版心に「柳枝軒」。二四ウ九行目が墨格。一〇行目に刊記「正徳三年癸巳正月吉日」あり。この枠外の左下に「六角通御幸町西入 書林多左衛門」とある。京の小川多左衛門のことで、元の刊記と同じ版元である。

【八四】参考太平記綱要 享保七年写 一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号：一六七・〇〇八〇」

本資料は軍記物語『太平記』の要点をまとめ、校訂を加えた注釈書。享保七年の書写で、編者の下田師古から幕府に献上された。袋綴。一冊。

下田師古は正徳五年に表御右筆、享保元年に奥御右筆を務めた幕臣で、和学者として徳川吉宗に仕えた。享保八年には書物奉行となっている。

本資料の奥書によれば、本資料は享保七年に編まれたもので、吉宗の意向を受け、献上されたものと思われる。この頃、紅葉山文庫は吉宗の命によって整理・拡大され、特に同年には佚書の収集・書写が行われた『好書故事』。本資料もそうした機運の中で編まれたものと考えられる。

本資料の保存状態は極めて良好。香色の帙（二九・三糎×二〇・二糎×二・〇糎）入り。帙には左肩に無地の題簽で「参考太平記綱要（墨書）」とある。帙は後年のものと考えられる。所蔵は当館のみが知られる。

【書誌】

外題・「太平記綱要 全」左肩打付墨書

内題・「参考太平記綱要」

表紙・浅葱色表紙（二九・〇糎×一九・五糎）

遊紙・一丁

料紙・楮紙

行数・每半葉七行

字面高さ・二一・五糎（見出し：二四・三糎）

匡郭・無辺無界

墨付丁数・一一五丁

印記・一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」

一一四ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

【写年・書写者】

一一五才の奥書は以下の通り。

「享保七年壬寅冬十一月十八日東都／右内史臣下田幸大夫師古奉／命考訂十二月二十四日請 欠進之」

【八五】太平記賢愚鈔 慶長一二年刊 二冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：一六七・〇一一二」

本資料は軍記物語『太平記』の注釈書で、慶長一二年に刊行された古活字版である。全四〇巻二冊。袋綴。

『論語』や『文選』などの漢籍から多くを引用し、注を付けている点特徴。また『太平記』の序を重視する。

本資料の奥書（天文十有二龍集癸卯冬十一月上旬／江州住侶乾三作之）によれば、天文一二年の成立だが、作者の乾三については伝未詳。

本資料のほか慶長一五年版が知られるが、写本に関しては伝来が知られていない。

本資料は紺色の帙（二八・〇糎×二一・五糎×三・五糎）に収められている。帙の左肩に無地料紙の題簽（二〇・〇糎×四・〇糎）で「太平記賢愚鈔」と墨書あり。帙は後補である。

二冊ともに一才に同一の印記「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」

「和学講談所」の印が捺してあり、本資料がもとは和学講談所の所蔵であったことがわかる。

全体的に状態は良いが、修復による手入れが目立つ。

【書誌】

外題・「太平記賢愚鈔」左肩打付墨書

内題・「太平記賢愚鈔」

表紙・朽葉色雷文繫艶出表紙（二七・五糎×二一・〇糎）

遊紙・各冊本文前後に一丁ずつ（後補）

料紙・楮紙

行数・每半葉一二行

字面高さ・二三・三糎

匡郭・四周双辺（二三・三糎×一七・五糎）

墨付丁数・①七二丁、②六四丁

印記・各冊一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

【刊年・刊行者】

②六四才の刊記は以下の通り。

「天文十有二龍集癸卯冬十一月上旬／江州住侶乾三作之／慶長十有二丁未曆仲夏如意珠日／於医徳堂以乾三正本刊行」

【八六】太平記鈔 慶長一五年刊か 一〇冊

旧蔵者不明 「請求番号：特二二六・〇〇〇三」

本資料は軍記物語『太平記』の注釈書で、慶長一五年に刊行されたと推

定されている古活字版。注釈四〇巻に加え、『太平記音義』二巻で全四二巻一〇冊。袋綴。

『太平記鈔』は『太平記』の流布本系のテキストを底本に、固有名詞(地名・人名等)を抜き出して注解を加えたもの。『太平記音義』は特に固有名詞の音義を注解したもので、版式や活字の形態から見て『太平記鈔』と同時期に刊行されたものと考えられ、本資料の場合は合わせて全四二巻一〇冊となっている。前掲資料『太平記賢愚抄』と共通する内容を持ち、『賢愚抄』を踏まえた上でより発展させた内容を持つ。

川瀬一馬氏の『古活字版之研究』によれば、本資料は慶長一五年版第一種に分類される。

各冊一才に「秘閣図書之章」の印が二種捺されている。紅葉山文庫旧蔵書に多いが、明治期に捺された可能性が高く、正確な旧蔵者ははっきりしない。

⑨ 飛丁あり。

【書誌】

外題・①～⑧太平記抄 一(八止) 左肩無地料紙題簽(二九・〇糎×三・五糎)に墨書

内題・「太平記鈔」

表紙・香色地格子刷毛目表紙(二八・〇糎×二〇・〇糎)

見返し・①「日本政府図書」蔵書票貼付

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二二行

字面高さ・二三・〇糎

匡郭・四周单边(二三・〇糎×一七・〇糎)

墨付丁数・①五五丁、②五四丁、③六〇丁、④四九丁、⑤四三丁、⑥五一丁、⑦五四丁、⑧六一丁、⑨四三丁、⑩四二丁

印記・各冊一才「秘閣図書之章」(二種)

【刊年・刊行者】

本資料に刊記はないが、川瀬一馬氏は『古活字版之研究』の中で、慶長一五年に刊行された『太平記』と同一の活字が用いられている点から、本資料も慶長一五年の刊行と推定している。

【八七】 太平記鈔 慶長一五年刊か 一〇冊

旧蔵者不明 「請求番号…一六七・〇〇七八」

本資料は前掲の『太平記鈔』の同版と推定されるもの。慶長一五年に刊行されたと推定される古活字版で、注釈四〇巻に加え、『太平記音義』二巻で全四二巻一〇冊。袋綴。

本資料は紺色の帙(二八・〇糎×二〇・五糎×九・五糎)に収納されている。帙の左肩に無地の題簽(二九・五糎×三・八糎)で「太平記鈔 古活」と墨書あり。帙は近年の後補である。

本資料は各冊一才に「日本政府図書」「浅草文庫」の蔵書印が捺されているのみで、それ以前の旧蔵者についてははっきりしない。③三九ウに、「師資」を「師弟」の意とする注記に対し、「師資ハ師弟ノコトニアラズ 師ハガリノ事ナリ」と墨書した付箋(二七・〇糎×三・五糎)が貼付されている。

前掲資料と同一箇所⑨に飛丁あり。

【書誌】

外題・①～⑧「太平記抄 自一至二（自三十一至四十一）」⑨⑩「太平記音義 上（下）」左肩無地料紙題簽（一九・七糎×三・七糎）に墨書

内題・「太平記鈔」

表紙・薄浅葱色表紙（二七・二糎×一九・八糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二二行

字面高さ・二三・〇糎

匡郭・四周单边（二三・〇糎×一七・〇糎）

墨付丁数・①五五丁、②五四丁、③六〇丁、④四九丁、⑤四三丁、

⑥五一丁、⑦五四丁、⑧六一丁、⑨四三丁、⑩四二丁

印記・各冊一才「日本政府図書」「浅草文庫」

【刊年・刊行者】

本資料に刊記はないが、前掲資料と同版と推定される。

【八八】太平記鈔 元和・寛永年間刊か 一〇冊

内務省旧蔵 「請求番号：特一二六・〇〇〇二」

本資料は前掲資料と同じ、軍記物語『太平記』の注釈書『太平記鈔』の古活字版で、元和・寛永年間に刊行されたと推定されるもの。注釈四〇巻に加え、『太平記音義』二巻で全四二巻一〇冊。袋綴。

川瀬一馬氏の『古活字版之研究』では、活字や版式から元和・寛永年間の刊行で、第二種本として分類されると推定されている。

蔵書印は各冊一才に「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年購求」、また各冊本文末尾に「大日本帝国図書印」「日本政府図書」の印がある。これらから、本資料は明治二二年に政府によって購入されたことがわかる。ただし、それ以前の旧蔵者については不明。

前掲資料と異なり、飛丁は見当たらない。

【書誌】

外題・①～⑧「太平記鈔 一（～八）」⑨⑩「太平記音義 九（十止）」

左肩四周双边刷題簽（一八・二糎×三・二糎）

内題・「太平記鈔」

表紙・栗皮表紙（二八・〇糎×二〇・三糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二二行

字面高さ・二一・八糎

匡郭・四周单边（二二・八糎×一七・〇糎）

墨付丁数・①五五丁、②五四丁、③六〇丁、④五〇丁、⑤四三丁、

⑥五一丁、⑦五五丁、⑧六一丁、⑨四三丁、⑩四二丁

印記・各冊一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年

購求」

本文末尾「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本資料に刊記はなく、活字・版式から元和・寛永年間の刊行と推定されているものである。

【八九】 太平記評判私要理尽無極鈔 刊年不明 四五冊

内務省旧蔵 「請求番号：一六七・〇一〇六」

本資料は軍記物語『太平記』の注釈書で、『太平記評判私要理尽無極鈔』の影響下で成立したものと考えられる。四〇巻四五冊。

『太平記評判私要理尽無極鈔』は『太平記』を軍学的・政治的な観点から批評、講じた内容を持ち、いわゆる「太平記読」のテキストだったと考えられているものである。これらは『太平記』を実用的に読む姿勢の表れで、戦国時代から江戸時代にかけて大いに流布し、江戸時代前期には繰り返し出版された。その影響下に成立した『太平記』の注釈は数多く『太平記理尽図経』『太平記綱目』などを挙げることができるが、本資料もそのうちのひとつである。序文によれば文明八年の成立だが、はっきりしない。

編者は和田助則とされるが、伝未詳。

本資料の各冊第一丁目には「明治十二年購求」の印があることから、明治一二年に政府によって購入されたことがわかる。

版心は中黒口・花口魚尾で、書名「無極抄」とある。

【書誌】

外題・①～④「太平記評判 一之上（～四十）」左肩四周双边刷題簽

（一八・五糎×三・五糎）

内題・「太平記評判私要理尽無極鈔」

表紙・香色表紙（二七・〇糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二一行

字面高さ・二一・七糎

匡郭・四周双边（二一・七糎×一六・七糎）、無界

墨付丁数・①三七丁、②五三丁、③三八丁、④六三丁、⑤四〇丁、

⑥三六丁、⑦二五丁、⑧四四丁、⑨三三丁、⑩三五丁、⑪三二丁、⑫

五二丁、⑬一九丁、⑭三六丁、⑮四九丁、⑯五四丁、⑰四〇丁、⑱八

五丁、⑲五五丁、⑳三三丁、㉑四二丁、㉒五四丁、㉓六九丁、㉔四六

丁、㉕六九丁、㉖三〇丁、㉗四八丁、㉘五二丁、㉙三七丁、㉚二七丁、

㉛二七丁、㉜三六丁、㉝三〇丁、㉞四〇丁、㉟四七丁、㊱五三丁、㊲

四一丁、㊳七二丁、㊴四四丁、㊵三七丁、㊶四三丁、㊷二八丁、㊸三

三丁、㊹三三丁、㊺二六丁

印記・各冊一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年購

求」

本文末尾「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本資料に刊記はなく、刊年・版元ともに不明。

【九〇】 難太平記 写年不明 一冊

林家旧蔵 「請求番号：一六七・〇〇七九」

本資料は軍記物語『太平記』の注釈書で、今川了俊の手によるもの。一冊。袋綴。

『難太平記』は今川了俊が、今川家の歴史や、足利將軍家と一族の関係を後世に伝えるため、『太平記』に評を加える形で著わした書で、長い時間をかけて少しずつ書き溜めておき、応永九年二月に完成させたものである。書名は後世、『太平記』に批判を加えたものという意から名付けられたと推定されている。



了俊が『難太平記』をまとめたときされる応永年間、所領を没収され、さらには病を得るといふ不遇の時期に当たると。これに關しても『難太平記』中の記述からわかる。

写本は尊経閣文庫本など多数が知られ、貞享年間にも出版されている。本資料は林家の旧蔵書で、第一丁目右下「弘文学士院」の朱印から、林鷺峰の手元にあったことが類推される。表紙右肩と本文末尾(三五ウ)には「昌平坂学問所」の墨印があり、林家から昌平坂学問所に納められたことがわかる。

#### 【書誌】

外題・「難太平記 全」左肩無地料紙題簽(二七・〇糎×三・三糎)に墨書 (※虫損あり)

内題・「難太平記」

表紙・小豆色表紙(二七・二糎×一九・二糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・三五丁

印記・表紙「昌平坂学問所」

一才「林氏蔵書」「浅草文庫」「弘文学士院」

三五ウ「昌平坂学問所」

#### 【写年・書写者】

本資料に奥書はなく、写年・書写者ともに不明。江戸時代初期前期の写。

【九一】難太平記 貞享三年刊 二冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号…一六七・〇〇七七」

本資料は前掲資料と同じ軍記物語『太平記』の注釈書『難太平記』で、貞享三年に出版されたもの。二巻二冊。

表紙の汚損が激しく、題簽は剥落している。わずかに残されている部分から想像するに四周双边刷題簽で「難太平記 上(下)」と外題があったと思われる。

「遊紙の部分に封面あり。『難太平記』雑陽書肆柳枝軒蔵版(印)」とあり、魁星印が捺されている。

第二冊目の裏表紙の表紙裏右下にめぐれがあり、「山善」(二一・〇糎×〇・八糎)「泉庄」(一・〇糎×〇・七糎)の墨印が見える。改装の際に捺されたか、もともと印記のある反故紙を補修に用いた等の理由が考えられる。表紙と本文末尾に「昌平坂学問所」の墨印あり。あわせて「文化丙寅」の朱印があることから、文化三年に昌平坂学問所に収蔵されたことがわかる。

#### 【書誌】

外題・「難太平記 上下」左肩四周双边刷題簽(※剥落あり)

内題・「難太平記」

表紙・薄浅葱色表紙(二七・二糎×一七・二糎)

料紙・楮紙

行数・序文每半葉六行、凡例・本文每半葉八行

字面高さ・一九・五糎

匡郭・四周单边(一九・五糎×一三・〇糎)

墨付丁数・①二五丁、②二六丁

印記・①②表紙「昌平坂学問所」

- ①②一才「日本政府図書」「浅草文庫」
- ①二五才・②二六才「文化丙寅」
- ①二五ウ・②二六ウ「昌平坂学問所」

【写年・書写者】

本資料の刊記は以下の通り(②二六ウ)。

「貞享三丙寅年季夏中浣日／京師茨城多左衛門／江都 富野治右衛門／繡梓」

京の茨城多左衛門は、封面の柳枝軒と同一。京の小川多左衛門のこ  
と。江戸の富野治右衛門は『参考保元物語』『参考平治物語』の版元で  
もある。

【九二】難太平記 貞享二年刊 二冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号：特〇二五・〇〇〇一」

本資料は前掲資料と同じ軍記物語『太平記』の注釈書で、前掲(請求番  
号：一六七・〇〇七九)の同版。二巻二冊。

見返しに封面あり。版面は前掲資料と同一で「難太平記／雒陽書肆柳枝  
軒蔵版(印)」とあるが、墨が濃い。また魁星印はなく、左肩に「日本政府  
図書」の蔵書票が貼付されている。

紅葉山文庫旧蔵書と推定され、全体に保存状態が極めて良い。

【書誌】

外題：「難太平記 上(下)」左肩四周双边刷題簽(一九・二糎×三・  
八糎)

内題：「難太平記」

表紙・紺色表紙(二五・八糎×一七・〇糎)  
料紙・楮紙  
行数・序文每半葉六行、凡例・本文每半葉八行  
字面高さ・一九・五糎

匡郭・四周单边(一九・五糎×一三・〇糎)

墨付丁数・①二六丁、②二七丁

印記・①一才「日本政府図書」「内閣文庫」、二六ウ「日本政府図書」

- 「内閣文庫」
- ②一才「日本政府図書」「内閣文庫」、二七ウ「日本政府図書」
- 「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料の刊記は以下の通り(②二七ウ)。

「貞享三丙寅年季夏中浣日／京師茨城多左衛門／江都 富野治右衛  
門／繡梓」

【九三】太平記評判秘伝理尽抄 寛文一〇年刊 三五冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号：一六七・〇一六五」

本資料は軍記物語『太平記』の注釈書『太平記評判秘伝理尽抄』の寛文  
一〇年版。『太平記』四〇巻に『恩地左近太郎聞書』一卷を加えた四一巻で  
三五冊。

『太平記評判秘伝理尽抄』は前述の通り、『太平記』を軍学的・政治的な  
観点から批評、講じた内容を持ち、いわゆる「太平記読」のテキストだっ

たと考えられているものである。江戸時代前期まで「太平記読」は人気を博し、本書も繰り返し出版されている。

奥書によれば、文明二年、今川心性（今川頼貞）が名和刑部左衛門に伝授した内容を、元和八年になってから大連院陽翁という僧が唐津藩主の寺沢広高に伝えたという。

『太平記』の各場面に「伝」と「評」が加えられており、「伝」では異説を紹介し、「評」では戦術や道徳的な批評が記されている。

本資料の各冊一丁目に「秘閣図書之章」の印が捺されていることから、紅葉山文庫旧蔵書と推定されている。

版心は中黒口花口魚尾で書名を「太平記評判」と出す。

### 【書誌】

外題・①～③④「太平記評判 目録二二（～四十）」左肩四周双辺刷題

簽（一九・〇糶×四・〇糶）、③⑤「太平記評判 恩地」左肩四周双辺刷

題簽（一九・〇糶×四・〇糶）

内題・「太平記評判秘伝理尽抄」

表紙・縹色表紙（二六・〇糶×一九・〇糶）

料紙・楮紙

行数・每半葉二一行

字面高さ・二二・〇糶

匡郭・四周双辺（二二・〇糶×一六・〇糶）

墨付丁数・①七〇丁、②六五丁、③七九丁、④七八丁、⑤八八丁、

⑥七六丁、⑦九三丁、⑧九四丁、⑨六六丁、⑩二二九丁、⑪六五丁、

⑫二〇四丁、⑬九八丁、⑭七二丁、⑮七二丁、⑯九五丁、⑰四九丁、

⑱五九丁、⑲九二丁、⑳九二丁、㉑六四丁、㉒二八丁、㉓六四丁、㉔

六四丁、㉕六八丁、㉖五三丁、㉗二一〇丁、㉘五三丁、㉙一三二丁、

③〇六三丁、③①三七丁、③②八一丁、③③六五丁、③④五二丁、③⑤五四丁

印記・各冊一才「秘閣図書之章」

### 【刊年・刊行者】

③⑤五四才に「寛文十庚戌稔初秋上旬／新板焉」の年記あり。版元については記載なし。

【九四】太平記評判秘伝理尽抄 寛文一〇年刊 一四冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：一六七・〇一一〇」

本資料は前掲資料『太平記評判秘伝理尽抄』の同版本。合冊されて一四冊。

各冊第一丁目に「和学講談所」の朱印があることから、和学講談所旧蔵書と判断される。題簽は無地料紙に墨書で「太平記評判」と出しているが、

脱落・一部欠落が多い。版心題も「太平記評判」とあり。中黒口花口魚尾。

第六冊目の見返しに、政府所蔵となつた際に使用されたと思われる分類用の題簽が貼付されている。

### 【書誌】

外題・①②④⑤⑧⑨⑩⑪⑫⑬「太平記評判 一之六（～廿五之廿七）」

左肩無地料紙（二八・五糶×三・五糶）に墨書、③「太平記 九之十」

左肩打付書、⑥「太平記評判 十六之十七」左肩打付書、⑦⑫欠、⑭

一部欠

内題・「太平記評判秘伝理尽抄」

見返し・⑥四周双辺刷題簽（二七・〇糶×三・五糶）に「軍記 十

三」と墨書したものが貼付、⑭農商務省の原稿用紙を裁断したもの（二

一・五糎×三・二糎)に「軍記 四 五号」と墨書(※「四」のみ朱書)したもの貼付

表紙・香色布目型押表紙(二六・五糎×一九・〇糎)

料紙・楮紙

行数・一一行

字面高さ・二二・五糎

匡郭・四周双边(二二・五糎×一九・三糎)、無算

墨付丁数・①一九三丁、②一六六丁、③一七三丁、④一六〇丁、

一九四丁、⑦一七二丁、⑧一七四丁、⑨一八六丁、⑩一六七丁、⑪一

八六丁、⑫一六三丁、⑬一三三丁、⑭一九七丁

印記・各冊一才「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文

庫

【刊年・刊行者】

本資料は刊記を欠く。

【九五】太平記之秘伝理書 明暦二年写 八冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：一六七・〇一一三」

本資料は前掲資料と同じ『太平記評判秘伝理尺抄』の写本で、明暦二年の奥書を持つ。四〇卷八冊。

やや大きめの本であり、毎半葉の行数も多め。「和学講談所」の蔵書印が見られることから和学講談所旧蔵書と判断されるが、それ以前の持ち主のものと考えられる方型陰刻印(一・八糎×一・八糎)もある。また第二冊目の本文末尾(三九ウ)に「正真(花押)」の墨書があり、共に円型墨印(一・

二糎×一・二糎)が捺されている。書写者のものと推測される。同一の花押が他の冊次(④⑤⑥⑧)の末尾にも見られる。

第二冊目の裏表紙左下に「備陽国岡山住ノ高岩源兵衛」と墨書打付がある。和学講談所以前の旧蔵者か。

【書誌】

外題・「太平記理尺抄」左肩無地料紙に墨書(一八・〇糎×三・五糎)

内題・「太平記之秘伝理書」

表紙・香色表紙(二七・八糎×二二・〇糎)

料紙・楮紙

行数・一二行

字面高さ・二三・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①一九丁、②三九丁、③三〇丁、④三九丁、⑤四九丁、⑥

五七丁、⑦五二丁、⑧五九丁

印記・各冊一才「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」

方型陰刻朱印(一・八糎×一・八糎)

各冊本文末尾「日本政府図書」

【写年・書写者】

⑦五一才「于時明暦丙申第二季壬卯月良辰 書之」とあり、この奥書によれば明暦二年の書写である。

【九六】太平記理尺図経 明暦二年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：一六七・〇〇九二」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題①」『北の丸』第四五号、平成二五年）参照のこと

【九七】太平記理尽図経 明暦二年刊 五冊

元老院旧蔵 「請求番号…一六七・〇〇九〇」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題①」『北の丸』第四五号、平成二五年）参照のこと

【九八】太平記大全 万治二年刊 五〇冊

内務省旧蔵 「請求番号…一六七・〇〇八三」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』第四六号、平成二六年）

【九九】太平記大全 万治二年刊 四九冊

和学講談所旧蔵 「請求番号…一六七・〇一〇三」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』第四六号、平成二六年）

【一〇〇】「太平記補闕」 寛文・延宝年間写 一冊

林家旧蔵 「請求番号…一六七・〇〇七〇」

本資料は軍記物語『太平記』諸本からの抜粋、および異同を記した注釈書の一つで、外題から『太平記補闕』と称されるもの。一冊。袋綴。

奥書によれば版本と「或本」（薩州本）と呼ばれる）との比較異同を行つたものである。本文に朱書・墨書の小字で書き入れをしている。

なお、奥書は二か所あり、一九ウに寛文八年の年記を持つもの、三三才に延宝元年の年記が見え、ともに「林学士」の署名がある。寛文・延宝年間の時期から考えるに、林鶯峰のことだと思われるが、本資料の筆跡は複数あり、長時間に渡り、複数名によって少しずつ編集されたと考えられる。

例えば最初の三丁は毎半葉一〇行の太字、四丁〜一九丁目は同じ毎半葉一〇行だが細字である。二〇丁目〜二二丁目は毎半葉九行で字高も低くなる。二三丁目〜二七丁目も毎半葉九行だが、字が細く小さくなる。二八丁目以降も毎半葉九行だが字高が大幅に高くなり、天に余白がほとんどない。蔵書印は一才に「林氏蔵書」「浅草文庫」「内閣文庫」「大学校図書之印」「日本政府図書」が見え、表紙右肩と末尾の三二ウに「昌平坂学問所」の墨印が捺されている。これにより、本資料が林家から昌平坂学問所に移り、のち政府の蔵書となったことがわかる。

【書誌】

外題・「太平記補闕」左肩打付墨書

内題・なし

表紙・栗皮表紙（二七・〇糎×二〇・〇糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・一才〜一九ウ 每半葉一〇行

二〇才〜三二ウ 每半葉九行

字面高さ・一才〜一九ウ 二二・〇糎

二〇才〜三三ウ 二一・五糎

二四才〜二七ウ 二一・五糎

二七ウ〜三二ウ 二四・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・三三丁

印記・一才「林氏蔵書」「浅草文庫」「内閣文庫」「大学校図書之印」

「日本政府図書」

表紙右肩・三三ウ「昌平坂学問所」

【写年・書写者】

本資料の奥書は二か所ある。

一九ウ「此一帖以薩州本補之／寛文戊申九月 林学士」

三三才「右十三枚以或本補之或本亦可為／薩州本平／延宝元年癸丑

十月 林学士」

これによれば、寛文八年から延宝元年までに書写されたものであることがわかる。

【二〇一】 太平記年表 元禄四年刊 三冊

元老院旧蔵 「請求番号：一六七・〇〇九九」

本資料は軍記物語『太平記』の注釈書で、元禄四年に刊行されたもの。

三冊。袋綴。

『太平記年表』は『太平記』本文の混乱した時系列を整理し、考証することに重きを置いた注釈書である。また登場人物の姓名についても中心的に注を加えている。

編者は河原貞頼。清水貞徳に学んだ測量家で、本姓は源。清水貞頼とも。美濃加納藩士で美濃の国絵図などを手掛けた。また『規矩元法』など測量法の著作を多く残しており、軍記物語の注釈書は本書のみが知られている。序文は『臨応活書』などの医学書を記した西村道益で、年記は元禄二年になっている。

本資料の場合、見返し部分に封面があったと思われるが、修復の際に剥がれたのか、遊紙の裏面に封面がきている。

【書誌】

外題・「太平記年表 卷之一（〜卷之四止）」左肩四周双边刷題簽（一

九・〇糎×四・三糎）

内題・「太平記年表」

表紙・代赭色表紙（二七・〇糎×一八・〇糎）

遊紙・封面「東武書林／太平記年表／岡部氏刊版（印）」

料紙・楮紙

行数・每半葉八行

字面高さ・二〇・〇糎

匡郭・四周双边（二〇・〇糎×一五・五糎、無界

墨付丁数・①五九丁、②二五丁、③四二丁

印記・各冊①才「元老院図書記」「太政官文庫」、各冊末尾「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

④ウに以下の通り刊記あり。

「元禄四辛未春分日／東武書肆 萬屋清兵衛／岡部三郎兵衛 寿梓」

【一〇二】 太平記演義 享保四年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：一七一・〇〇一三」

本資料は軍記物語『太平記』を中国の白話小説に倣い、改編した通俗本。享保四年に出版された。五巻五冊。

『太平記演義』は全四〇巻の『太平記』を五巻五冊にダイジェスト化し、上下二段に白話文三十回と漢字片仮名混じり文三十段で記したもの。銜学的な『太平記』の故事の引用を省き、ストーリーをわかりやすく追うことができるようになっていいる。著者による改変も少なくなき、より通俗的な内容になっている。

著者は岡島冠山。長崎の人で、漢学・唐話を能くし、通事・訳師として活躍した。特に唐話参考書を多く刊行、中でも中国の白話小説の傑作『水滸伝』を翻訳、近世期の『水滸伝』流行を支えた。本書もまた『太平記』を中国風に翻案・翻訳した点は、当時としては類を見ない。

表紙右肩に「番外書冊」の墨印がある。これは昌平坂学問所が書物の分類に使用していた印で、本資料が昌平坂学問所の旧蔵であることがわかる。

【書誌】

外題・①「太平記演義 并通俗 一」左肩打付墨書、②「太平」記演義 并通俗 二 左肩四周双边刷題簽一部欠、③④⑤「新編／太平記演義 并通俗 三（〜五）」左肩四周双边刷題簽（一八・二種×四・

七糎）

内題・なし

表紙・香色表紙（二七・〇糎×一八・五糎）

見返し・封面「享保己亥秋新編／今雖未得全終辱承諸君子之徵先梓三／十回以猷之餘回必當不久而續梓焉／太平記演義／京師書林 松栢堂 刊行／江戸版匠 通油町 甚四郎」

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一四行

字面高さ・上段一一・五糎、下段一一・五糎

匡郭・四周单边（二三・〇糎×一五・五糎）

墨付丁数・①三三丁、②三四丁、③三三丁、④三〇丁、⑤三〇丁

印記・表紙右肩「番外書冊」

一才「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」

【刊年・刊行者】

本資料の封面（前掲）によれば、本資料は享保四年の刊行。封面の「京師書林 松栢堂」は、京の出雲寺和泉掾。「江戸版匠 甚四郎」はおそらく江戸の丹波屋甚四郎であろう。

【一〇三】 吉野拾遺 写年不明 一冊

林家旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇六四」

本資料は室町時代に成立したと考えられる説話集『吉野拾遺』の写本で、

林鷺峰の手跋本として知られるもの。二卷二冊。

『吉野拾遺』は後醍醐天皇や後村上天皇の治世を舞台に、和歌説話や『太平記』などに取材した逸話を多く載せる説話集である。成立年代・作者ともにはつきりしないが、南朝に同情的な人物の手によるものと考えられている。二巻本と三巻本が知られ、版本は三巻本の場合が多いが、本資料は二巻一冊の写本である。

末尾（七五丁目）に鷺峰の手による跋文が記されている。これによれば当時『吉野拾遺』は稀覯本だったという。

一才に「林氏蔵書」の印がある点からも、本資料は鷺峰の手元にあったものとみて間違いない。表紙右肩および本文末（七五ウ）に「昌平坂学問所」の印があることから、林家からのち昌平坂学問所へ収蔵されたことがわかる。

#### 【書誌】

外題・「吉野拾遺 上下」左肩打付墨書

内題・「吉野拾遺」

表紙・香色表紙（二八・七糎×一九・〇糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・一九・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・七五丁

印記・表紙右肩「昌平坂学問所」

一才「林氏蔵書」「大学校図書之印」「日本政府図書」「浅草文

庫「大日本帝国図書印」

七五ウ「昌平坂学問所」

#### 【写年・書写者】

七五ウの跋文に「延宝己未之夏鷺峰散人跋」の年記あり。これによれば跋文は延宝七年の写である。

【一〇四】芳野拾遺物語 貞享四年刊 四冊

町田久成旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇五七」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』第四六号、平成二六年）参照の事

【一〇五】芳野拾遺物語 写年不明 一冊

町田久成旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇六一」

本資料は室町時代に成立したと考えられる説話集『芳野拾遺物語』の写本。四卷一冊。袋綴。

全四巻として書写されているが、実際には貞享四年版に見られるように第三巻を上下に分けたもの。版本の場合は第三巻が分冊となり、全四冊になるが、本資料の場合はこの第三巻の後半を第四巻として立てた上で一冊に書写している。実態は三巻本である。

なお五三丁目以降は「勘物」として、「奥書」「作者」「闕卷」に関する論考を載せる。



本資料の第二丁目には「町田久成献納之章」の印が捺されており、本資料が町田久成の旧蔵であったことがわかる。

【書誌】

外題・「吉野拾遺 完」左肩四周双边刷題簽(二五・八糎×二・五糎)

内題・「芳野拾遺物語」

表紙・砥粉色表紙(二六・〇糎×一八・七糎)

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一四行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・五四丁

印記・一才「書籍館印」「日本政府図書」「町田久成献納之章」「浅草

文庫」

五三ウ「日本政府図書」

【写年・書写者】

本資料には書写者による奥書がなく、正確な写年・書写者は不明。

【一〇六】軍記抜書 写年不明 二六冊

旧蔵者不明 「請求番号：二二四・〇〇三四」

本資料は軍記物語の注釈や本文の一部を抜粋して編集したもので、当館にのみ伝来の知られる写本である。全二六冊。大和綴。

引用されているのは、それぞれ①『保元物語』②『平治物語』③④⑤⑥『平家物語』⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬『源平盛衰記』⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔『太平記』㉕『明德記』㉖『応仁記』だが、㉓㉔は『参考太平記』と写本の校合をしており、また㉓は『盛衰記』と外題を出しているため、軍記抜書九種と数えられている。

本資料は全二六冊だが、装丁が同じだけで、大きさ・筆跡・形式がそれぞれ異なっており、もともと別に書写されたものを取り合わせた本であることがわかる。表紙は、包背装のように、厚紙をオモテ表紙から背表紙、ウラ表紙へと回しているが、糊は使わずに糸で大和綴の状態にしてあり、仮の装丁だといえる。

いずれも注釈書の編纂のために使用された草稿である。注釈書の完成後に取りまとめて簡単な装丁を施し、保存用に残したと推定される。長坂成行氏の論考(『写本太平記参考太平記見合抜書』解説、付「軍記抜書九種」覚書)『奈良大学紀要』第二号、一九九三年)によれば、本資料は江戸時代中期の故実家である伊勢貞丈が『五武器談』『武器考証』を編んだ際の礎稿であるという。共に明和年刊の成立なので、本資料もそれに近い年代の成立ということになる。

『平家物語』の場合は、校訂に使用した諸本(版本・城方本・岩橋本(流布本)・長門本)を表紙に外題と共に墨書している。㉓は「盛衰記」と外題を出し、㉗㉘の「源平盛衰記抜書」と別に立てているが、㉓は『源平盛衰記』の中から特に武器・装束に関する箇所だけを抽出したもの。㉓㉔は『参考太平記』とほかの写本の比較校合をしている。この「写本」と呼ばれているテキストについては、先に挙げた長坂氏がその論考の中で、現在伝来を見ない本文系統であることを指摘しており、『太平記』諸本の研究において重要な意味を持つ。

右肩に貼付された四周双边の刷題簽(二二・〇糶×二・八糶)は後補で、「軍記拔書」の書名も仮のもの。  
各冊、表紙の右下あるいは左下に「共四十八」の墨書あり。

【書誌】

外題・①～②⑥「軍記拔書 九種 共二十六冊」右肩四周双边刷題簽(二二・〇糶×二・八糶)に墨書、①「参考保元物語拔書 自一至三下」左肩打付墨書、②「参考平治物語拔書 自一上至三下」左肩打付墨書、③「板本城方本岩橋本は自卷第一至第五長府本は自五十一至第六長府本も卷自第十至第■／平家物語拔書」左肩打付墨書、④「板本城方本岩橋本は卷自第五至第六長府本も卷自第十至第■／平家物語拔書」左肩打付墨書、⑤「板本城方本岩橋本は自卷第七至第九長府本は自第十三至十六／平家物語拔書」左肩打付墨書、⑥「板本城方本岩橋本は自卷第十至第十二長府本は自第十七至第廿／平家物語拔書」左肩打付墨書、⑦「源平盛衰記拔書 自第一至卷第十」左肩打付墨書、⑧「源平盛衰記拔書 自第十一至第廿」左肩打付墨書、⑨「源平盛衰記拔書 自卷第廿一至第三十」左肩打付墨書、⑩「源平盛衰記拔書 自第二十一至第三十五」左肩打付墨書、⑪「源平盛衰記拔書 自卷第三十六至第四十」左肩打付墨書、⑫「源平盛衰記拔書 自卷第四十一至第四十八 終」左肩打付墨書、⑬「盛衰記拔書」左肩打付墨書、⑭「参考太平記拔書 自一至八」左肩打付墨書、⑮「参考太平記拔書 自九至十二」左肩打付墨書、⑯「参考太平記拔書 自十三至十五」左肩打付墨書、⑰「参考太平記拔書 自十六至十七」左肩打付墨書、⑱「参考太平記 自十八至廿二」左肩打付墨書、⑲「参考太平記拔書 自廿三至廿六」左肩打付墨書、⑳「参考太平記拔書 自廿七至卅二」左肩打付墨書、㉑「参考太平記拔書 自卅一至卅五」左肩打付墨書、㉒「参考太平記拔書 自

卅六至卅九」左肩打付墨書、㉓「写本太平記／参考太平記／見合拔書／自一卷廿卷迄」左肩打付墨書、㉔「写本太平記／参考太平記／見合拔書／自廿一至四十卷」左肩打付墨書、㉕「明德記拔書」左肩打付墨書、㉖「応仁記拔書」左肩打付墨書

内題・①「参考保元物語」、②「参考平治物語」、③～⑦「平家物語拔書」⑧～⑫「源平盛衰記拔書」、⑬「盛衰記」、⑭～⑲「参考太平記」、⑳㉑なし、㉒「明德記」、㉓「応仁記」

表紙・①～⑥金茶色地縹色横刷毛目表紙(二九・八糶×二一・〇糶)、⑦～⑬同(二八・〇糶×一九・二糶)、⑭～⑲同(二九・二糶×二〇・〇糶)、⑳～㉒同(二八・〇糶×一九・五糶)  
遊紙・各冊末尾一丁

扉・各冊一丁ずつ書名の墨書あり、①「参考保元物語拔書 自一至三下」、②「参考平治物語拔書 自一至三下」、③「平家物語拔書 板本城方本岩橋本は卷第一より卷第五に分／長府本は卷第一より卷第十に分」、④「平家物語拔書 板本城方本岩橋本は卷第五より卷第六に分／長府本は卷第一より卷第十に分」、⑤「平家物語拔書 板本城方本岩橋本は卷第七より卷第九に分／長府本は卷第十二より卷第十六に分」、⑥「平家物語拔書 板本城方本岩橋本は卷第十七より卷第二十に分 終」、⑦「源平盛衰記拔書 自第一／至卷第十」、⑧「源平盛衰記拔書 自卷第十一／至卷第二十」、⑨「源平盛衰記拔書 自卷第二十一／至卷第三十」、⑩「源平盛衰記拔書 自卷第三十一／至卷第三十五」、⑪「源平盛衰記拔書 自卷第三十六／至卷第四十」、⑫「源平盛衰記拔書 自卷第四十一／至卷第四十八 終」、⑬「盛衰記拔書」、⑭「参考太平記 従一／至八」、⑮「参考太平記 従

九至十二、⑬「参考太平記抜書 従十三／自十五」、⑭「参考太平記抜書 従十三／至十七」、⑮「参考太平記抜書 従十八／至廿二」、⑯「参考太平記抜書 従廿三／至廿六」、⑰「参考太平記抜書 従廿七／至卅一」、⑱「参考太平記抜書 従卅二／至卅五」、⑳「参考太平記抜書 従卅六／至卅九」、㉑「写本太平記／参考太平記／見合抜書／右二十一卷ヨリ四十卷マデ」、㉒「明德記抜書」、㉓「応仁記抜書」

料紙・楮紙

行数・①②毎半葉八行、注は双行、③④毎半葉八行、注は下部あるいは双行、⑤⑥毎半葉七行、注は双行、⑦⑧毎半葉七行、⑨毎半葉一行、⑩⑪毎半葉七行、注は下段、⑫⑬毎半葉七行、⑭⑮毎半葉九行、⑯⑰毎半葉七行

字面高さ・①②二四・〇糎、③④二三・五糎、⑤⑥二四・五糎、⑦⑧二五・〇糎、⑨上段(本文)一三・五糎、下段(注)一三・五糎、⑩⑪二四・〇糎、⑫⑬二四・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①二〇八丁、②七六丁、③六三丁、④四二丁、⑤八九丁、⑥七四丁、⑦五八丁、⑧七六丁、⑨七三丁、⑩六六丁、⑪六一丁、⑫六三丁、⑬二二丁、⑭九〇丁、⑮六七丁、⑯七二丁、⑰七〇丁、⑱六〇丁、⑲六四丁、⑳七二丁、㉑六〇丁、㉒五六丁、㉓二二丁、㉔二三丁、㉕一七丁、㉖一六丁

印記・一才「日本政府図書」「浅草文庫」

【写年・書写者】

本資料は冊次によって書写者が異なっていると見られる。筆跡だけでなく、本の大きさや形式にも違いがあり、写年もそれぞれ異なる

思われる。ただし、『武器考証』などの成立年代を踏まえると、明和年間以前の書写であると考えられる。

【一〇七】源平軍物語 明暦二年刊 一〇冊

旧蔵者不明 「請求番号：二〇四・〇〇〇九」

本資料は治承・寿永の内乱(源平合戦)に取材した戦記で、軍記物語の影響を受けつつも、大衆向けに平易に改変したものである。全二五卷一〇冊。序文によれば『平家物語』に記されない部分を補う目的で、平家の栄華から滅亡を描いたという。内容はわかりやすく改編され、源平合戦の顛末を簡潔にまとめている。作者未詳。

本資料に関しては、題簽や一丁目に貸本屋のものと思われる墨印(「高定」「松」「イセ」「本久」)が複数見られ、多くの人々の手に渡っていたことを想像させる。一冊目に関しては題簽とともに改装されており、ほかの冊次も元題簽を残してはいるが表紙は後補だろう。

⑤裏表紙には落書あり。「山口隼人／藤原兵部」墨書。

【書誌】

外題・①「源平軍物語」左肩四周双边刷題簽(一八・五糎×三・五糎)に墨書、②⑩「源平軍物語」左肩四周双边刷題簽(一七・三糎×三・五糎)

内題・「源平軍物語」

表紙・①横刷毛目表紙(二五・〇糎×一八・〇糎)、②⑩紺色表紙(同)

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・四周単辺（二一・〇糎×一五・五糎）

墨付丁数・①六一丁、②三二丁、③四五丁、④六一丁、⑤四一

丁、⑥四七丁、⑦七五丁、⑧三五丁、⑨七〇丁、⑩三七丁

印記・一オ「日本政府図書」「浅草文庫」

②⑩一オ「高定」（楕円形墨印）、「松」（円形墨印）「イセ」

（井桁型墨印）「本久」（長方形墨印）

題簽「高定」「松」

【写年・書写者】

⑩三七ウに以下の通り、刊記あり。

「明暦二丙申年孟春吉旦」

【二〇八】頼光御一代記 写年不明 六冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇一一」

本資料は摂津源氏の祖である源頼光の伝記で、当館の所蔵のみが知られている写本。一二卷六冊。

源満仲の子として頼光が誕生する段から、四天王と呼ばれる家臣たちの逸話、そして名高い土蜘蛛退治や大江山の酒吞童子退治が描かれ、頼光と四天王が没するまでを時系列順に描いている。いずれも説話集や御伽草子など、先行する頼光伝説を題材に採る。江戸時代後期には子ども向けの絵

本や黄表紙などの娯楽的な絵本の題材として「頼光一代記物」と呼ばれる一連の作品群が作られるようになり、本資料もその影響下にあるものだと考えられる。ただし、子供向けや娯楽用の作品がいずれも一巻〜五巻程度の短いものであるのに対し、本資料は一二卷六冊の長さを持つ。

各冊に二巻ずつまとめられ、巻の冒頭には目録が立てられている。題簽は金切箔をまぶした料紙で作られているが、第二冊目だけ題簽が脱落しており、外題は打付書になっている。

表紙の右肩には「番外書冊」の墨印、右下にあわせて「昌平坂」の墨印あり。本文の末尾にも同じ「昌平坂」の墨印と、「慶應乙丑」の朱印がある。これにより、本資料は慶応元年に昌平坂学問所に収蔵されたものと想像される。

【書誌】

外題・「源頼光一代記 一一（〜十一 十一 終）」左肩金切箔料

紙題簽（一八・〇糎×三・五糎）に墨書（※②のみ題簽欠）「源頼光一

代記」左肩打付墨書

内題・「頼光御一代記」

表紙・薄浅葱色表紙（二七・〇糎×一九・五糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・一八・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①五六丁、②四五丁、③四二丁、④三六丁、⑤三六丁、

⑥二七丁

印記・各冊表紙「番外書冊」「昌平坂」

各冊一才「日本政府図書」「浅草文庫」

各冊二才「内閣文庫」

各冊本文末尾「内閣文庫」「慶應乙丑」「昌平坂」

【写年・書写者】

本資料には奥書がなく、写年・書写者についてははっきりしない。筆跡から見て江戸時代後期〜末期か。

【二〇九】多田五代記 元禄四年刊 一〇冊

旧蔵者不明 「請求番号：二〇四・〇一一」

本資料は源満仲（多田満仲）に始まる多田源氏五代を描いた伝記で、元禄四年の刊行。一〇巻一〇冊。

本書は跋文によれば、満仲の後裔とされる有職故実家の多田兵部（多田義俊、源満泰）の蔵書のもとに、巷説の逸話を加えながら満仲誕生から八幡太郎義家の活躍までを編集したもので、元禄四年に刊行された。ほかの版については伝来を見ない。

本資料の場合、状態はあまり良くなく、虫損が目立つ。表紙は縹色で一されているが、裏表紙だけ横刷毛目の表紙の冊もあり、改装が加えられていることがわかる。題簽も脱落が多い。

本資料には「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」の印が見られるが、政府の所蔵となる以前の所蔵者については未詳。各冊末尾に「伊平」(二・五糶×一・〇糶)の墨印(長方陽刻)があり、貸本屋のものと想像される。

【書誌】

外題・②⑥「多田満仲五代記 二(六)」左肩打付墨書 ①④「多田満仲五代記 巻(四)」左肩無地料紙題簽(二八・五糶×三・〇糶)に墨書、③⑤⑦⑩「多田満仲五代記 三(五・七〜七)」左肩四周双辺刷題簽(一八・八糶×三・〇糶)

内題・「多田五代記」

表紙・縹色表紙(二七・〇糶×一九・〇糶) ※①③④⑥⑩裏表紙は横刷毛目)

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二一・五糶

匡郭・四周单辺(二一・五糶×一四・八糶)

墨付丁数・①二九丁、②三三丁、③二六丁、④三三丁、⑤二八丁、

⑥二二丁、⑦二二丁、⑧三〇丁、⑨二七丁、⑩三三丁

印記・各冊一才「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」

各冊末尾「内閣文庫」「伊平」(二・五糶×一・〇糶、長方陽刻墨印)

【刊年・刊行者】

跋文の年記(⑩三三才)は以下の通り。

「元禄四年辛未春三月吉旦／染翰於銅駄城下昌楽庵瀧川育子欽稿」

昌楽庵瀧川育子については伝未詳。

刊記(⑩三三才)には以下の通り。

「元禄四辛未稔仲春吉旦／書林／茨木太左衛門／浅野久兵衛／田中

庄兵衛

茨木太左衛門は京の書肆で曹洞宗御用をつとめた小川多左衛門のこと。浅野久兵衛、田中庄兵衛ともに京の大きな書肆である。

【一一〇】公武栄枯物語 元禄七年刊 八冊

鹿都部真顔旧蔵 「請求番号：一六七・〇〇五〇」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」(『北の丸』第四六号、平成二六年) 参照の事

【一一一】曾我勲功記 享保六年刊 五冊

朝川善庵旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇一四」

本資料は曾我兄弟の仇討ちを描いた伝記で、享保六年に出版されたもの。別名『曾我復讐記』。全一八巻を合冊して五冊。袋綴。

本書は曾我兄弟の仇討ちを描いた『曾我物語』を編集・改編したもので、出版当時の庶民に読みやすい内容となっている。

初版は正徳五年。作者の馬場信意は本書のほかにも『曾我物語評判』『義貞太平記』などを記した作家で、古典的な軍記物語を研究し、軍書・軍談として新しく近世にふさわしい内容に書き直したことで知られる。号は柳隠子・羅月堂、別名に山川素石など。京の人で、享保一三年に六〇歳で没。本書の目録部分の内題は「曾我勲功記」で、当館の蔵書目録はこれを書名として採ったものだが、馬場信意の手による序文には、「曾我復讐記」と

いう題が付けられている。なお外題は「曾我勲功記」と無地の題簽(二七・二糎×三・〇糎)に墨書してあり、後補であると推定される。本資料の各冊一才には、「善庵図書」の印が捺されており、本資料が朝川善庵の旧蔵書であることがわかる。朝川善庵は江戸時代末期の漢学者で、名は鼎で、号は善庵のほか学古塾など。江戸の人だが諸国に遊学した。嘉永二年に六九歳で没。漢学者としての著作も多いが、蔵書家としても知られる。

本資料にはほかにも「守静亭図書記」の朱印(所蔵者不明)と、「明治十三年購求」の印があり、朝川善庵の手元を離れたのち、明治一三年に政府によって購入されたことがうかがえる。

【書誌】

外題・「曾我勲功記 一一一(十五ノ十八)」左肩無地料紙題簽(一七・二糎×三・〇糎)に墨書

内題・「曾我勲功記」

表紙・紺色表紙(二五・〇糎×一八・〇糎)

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・四周单边(二〇・〇糎×一五・八糎)

墨付丁数・①六二丁、②九一丁、③九六丁、④七八丁、⑤九二丁

印記・各冊一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「善庵図書」

「守静亭図書記」「明治十三年購求」

【刊年・刊行者】

⑤八八ウにある刊記は以下の通り。

「享保六辛丑冬十月」

左下に版元のものと思われる朱印「本／麻布市兵衛町／伊勢屋忠兵衛（三・五糎×一・二糎）がある。印の伊勢屋忠兵衛は江戸の版元と思われるが、本資料の⑤八九ウ九一は大坂の版元浅野弥兵衛（藤屋弥兵衛、星文堂）の出版目録が載る。軍記のほか『源氏十二段』など初学者向けの古典や『実語教かるた』百人一首の関連書など、子ども・女性向けの教養書が目立つ。本資料の読者層を物語るものであろう。

【一一二】難波草紙 慶長年間書写カ 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇八六」

本資料は慶長年間に書写されたと考えられる室町物語で、当館のみ所蔵が知られるもの。一冊。袋綴。

当館には本資料のほか『墨海山筆』に収録された写本（請求番号：二一七・〇〇三一（六六））があるが、誤写が多いため本資料のほうが善本といえよう。

内容は寺に入った稚児に向けて、あるべき姿を説くもので、稚児向けの教訓書として書かれたと推定されている。同時に、悪い例として博打や連歌に興じる「悪若衆」の姿も描かれており、当時の寺の稚児たちの暮らしぶりや風俗を伝える資料となっている。

本資料の表紙は濃茶色で、中央に朱色の題簽で「なにはのさうし」と出してあるが、本文の筆跡とは異なっており、表紙ごと後補であると推測さ

れる。現在の扉（二才）には、左肩に「難波草紙」と墨書してあり、全体のヤケから判断するに、元はこの部分が表紙だったと考えられる。本文とは共紙。

本文冒頭部分（二才）に「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」「内閣文庫」「内閣文庫」、本文末尾（二三才）に「内閣文庫」の印がある。したがって本資料は和学講談所の旧蔵。

なお、本資料は砥粉色の帙（二五・〇糎×二〇・五糎×一・三糎）に収められている。帙の左肩に無地料紙で題簽（一七・〇糎×三・七糎）あり。墨書で「難波草紙」と出してあるが、この帙はさらに後補で近年のものである。

【書誌】

外題・「なにはのさうし」 中央朱色題簽（一五・五糎×三・三糎）

内題・「難波草紙」

表紙・濃茶色表紙（二四・三糎×二〇・〇糎）

遊紙・なし

扉・左肩に墨書「難波草紙」、右下に墨書「三慶」

料紙・楮紙

行数・每半葉八行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・一三丁

印記・二才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

「内閣文庫」「内閣文庫」

一三才「主三才盛政」

【写年・書写者】

本資料の写年ははっきりしないものの、書写者の「三慶」「三十郎盛政」については、和泉国の地侍である新川盛政であることがすでに先学によって指摘されている。(近藤孝敏「中世末〜近世初頭の「中庄新川家文書」(『泉佐野市史研究』第九号、二〇〇三年)、山村規子・大利直美「難波草紙」再考」(『地域文化の歴史を往く』和泉書院、二〇一二年)等)

「三慶」は盛政が稚児として根来寺に仕えていた頃の名で、盛政を作者として同定するにはまだ根拠が足りないものの、自身の見聞した中世寺院の様子が本書には反映されていると推定される。必然的に本資料の書写年代は盛政が根来寺に仕えたあとから三十郎を名乗るようになった時期で、慶長年間のことと推定される。

【一一三】さくらの中將 寛文一〇年刊 一冊

内務省旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇七九」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」(『北の丸』第四六号、平成二六年) 参照の事

【一一四】わかくさ物かたり 天和三年刊 一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇九五」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」(『北の丸』第四六号、平成二六年)

年) 参照の事

【一二五】岩屋のさうし 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇八四」

本書は室町時代前期頃に成立した御伽草子のひとつで、別名に『岩屋物語』『岩屋』などと称されるもの。上下二巻一冊。袋綴。

内容としてはいわゆる典型的な継子いじめの物語だが、『鉢かづき』などに見られる嫁比べの場面を持つなど、様々な御伽草子の影響下にあることが想像される。しかし『風葉和歌集』に収められている『いはや』の改作とも考えられており、ヒロインが岩屋で養育されるというモチーフは『浜松中納言物語』など平安時代まで遡ることができ、様々な手を加えられながら形を変えてきたと思われる。

主人公の姫君は、父中納言が書写山に参籠しているその隙に、継母の命令を受けた武士に殺されそうになる。しかし、武士は姫君を哀れに思い、海中の岩に置き去りにする。数日後、姫君は明石の海士夫婦に見出されて岩屋で養育された。のち関白の子である二位中将に見出された姫君は、京へ連れられ中将と契りを結んで子をもうけた。やがて姫君は父とも再会し、すべてが継母の仕業であることが露見する。追放された継母は姫君を呪詛するが、やがて自ら物が物狂いとなった。一方、姫君を養育した海士夫婦は位階や領地を授けられて栄え、姫君の一族も繁栄した。

多くが絵巻・奈良絵本など、挿絵を伴う形で製作され、天理図書館やニューヨーク・スペンサー・コレクションの蔵書が知られる。また版本も寛永から宝永徳頃まで繰り返し出版されている。



本資料は江戸時代の写本だが、挿絵はない。水損がやや目立ち、表紙の左肩が損なわれて、元の題簽は失われたと想像される。外題は左肩に朱で打付書されている。ただし、その現在の香色表紙も後補であろう。

第一丁目右下に「和学講談所」の朱印があり、本資料が和学講談所の資料であることがわかる。

【書誌】

外題・「岩屋のさうし」左肩打付朱書

内題・「岩屋のさうし」

表紙・香色表紙（二六・〇糎×二〇・〇糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・四三丁

印記・一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

「内閣文庫」

四三ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料に奥書はなく、写年・書写者ともに不明。

【二一六】「狭衣中将物語」 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇三・〇〇六一」

本資料は平安時代に成立した『狭衣物語』を改変して成立した御伽草子で、『狭衣』『狭衣の草子』とも呼ばれる。一冊。袋綴。

王朝物語である『狭衣物語』が、優柔不断な主人公狭衣の恋愛遍歴を描いていく一方、御伽草子の場合は物語序盤のヒロインである飛鳥井君に焦点を当て、狭衣との恋と別れ、成就を描く。文量や登場人物が大幅に削られ、平易でわかりやすい内容になり、狭衣と飛鳥井君のすれ違いは一層ドラマティックに改変されており、当時の読者の求めたものを想像させる。特に、『狭衣物語』では悲劇的な人生を送る飛鳥井君が狭衣と無事に結ばれ、めでたい結末を迎える点は、室町時代の御伽草子らしさといえる。

本資料は内題を持たず、目録書名は表紙に打付書された外題に基づく。第一丁目右下に「和学講談所」の蔵書印が捺されており、和学講談所の旧蔵書だったことがわかる。

【書誌】

外題・「狭衣中将物語」左肩打付墨書

内題・なし

表紙・香色布目型押表紙（二六・〇糎×一七・七糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二三・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・三九丁

印記・一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

「内閣文庫」

三九才「内閣文庫」「日本政府図書」

【写年・書写者】

本資料に奥書はなく、写年・書写者ともに不明。

【二一七】秋の夜長物語 寛永十九年刊 一冊

林家旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇八一」

本資料は南北朝時代に成立した御伽草子のひとつ『秋の夜の長物語』で、寛永十九年に出版されたもの。一冊。袋綴。

『秋の夜の長物語』は稚児物語と呼ばれる、僧と稚児の関係や発心などを描く作品群の中でも最も代表的なものである。国文学研究資料館が所蔵する永和三年本をはじめ、多くの写本が伝存し、また元和頃には古活字版が出版されて以降、繰り返し出版され、広く流布した。

比叡山延暦寺（山門）の僧である桂海は、三井寺（園城寺、寺門）の稚児である梅若と出会って恋に落ちる。ところが桂海に会うために三井寺を出た梅若は天狗に攫われてしまう。この失踪事件をきっかけに、山門と寺門は合戦となり、これを知った梅若は自責の念にかられて入水を遂げる。無常を感じた桂海は比叡山を出て修行を重ね、のちに尊い上人になった。実は梅若は桂海を発心させるための観音の化身だった。

たびたび合戦を繰り返した山門と寺門の対立が、当時の時代背景として物語の中に反映されている。また僧と稚児の性的関係も当時の世相を反映したものである。一方、稚児が入水するというモチーフや、稚児を観音の化身として物語を結ぶ形は、さまざまな説話や伝承に見られるもので、普遍的な側面を持っている。

本資料は寛永十九年に刊行された整版本で、挿絵はない。第一丁目に「林氏蔵書」の朱印があり、また表紙と本文末尾に「昌平坂学問所」の墨印があることから、林家から昌平坂学問所に伝わった資料ということがわかる。

【書誌】

外題・「秋夜長物語」左肩打付墨書

内題・「秋の夜長物語」

表紙・香色表紙（二七・五糎×一八・〇糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一行

字面高さ・二一・三糎

匡郭・四周单边（二一・三糎×一五・八糎）

墨付丁数・二八丁

印記・表紙右肩「昌平坂学問所」

一才「林氏蔵書」「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」

二八ウ「昌平坂学問所」「内閣文庫」

【刊年・刊行者】

二八ウの本文末尾に刊記あり。

「寛永十九年五月日 安田十兵衛」

安田十兵衛は京の版元で、この頃は三条寺町誓願寺前で、門前の本屋として出版業を営んでいたと思われる。

【二一八】松帆物語 附鳥部山物語 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇八五」

本資料は一般的には『松帆の浦物語』と呼ばれる室町物語で、前掲の『秋の夜長物語』同様に稚児と僧の愛執を描いた「稚児物語」と呼ばれる一連の作品群のひとつである。頭書に注釈を載せる。また本資料の場合、同じ「稚児物語」に分類される『鳥部山物語』（『鳥辺山物語』）を後半に付している。一冊。袋綴。

『松帆の浦物語』は、比叡山の稚児だった藤侍従という主人公が、宰相の君と呼ばれる僧と恋に落ちる物語。しかし藤侍従の美しさに横恋慕した左大将によって二人は引き裂かれ、宰相の君は淡路島に流罪になる。やがて藤侍従は宰相の君を追って淡路島の松帆の浦に駆け付けるが、すでに宰相の君は亡くなっており、藤侍従は出家して旅の僧となる。

諸本の巻末に「兼載在判」の奥書があり、作者は室町時代末期の連歌師猪苗代兼載に擬せられる。ほかの稚児物語に比べ、宗教色が薄く、王朝物語の影響が強い点が特徴的である。

『鳥部山物語』は、美しい稚児藤の弁を垣間見て、恋焦がれた民部卿の物語。二人はやがて契りを結ぶが、民部卿は故郷の武蔵へと帰ってしまい、藤の弁は悲しみのあまり病に伏せてしまった。やがてめのとが武蔵から民部卿を連れ戻すが、そのとき藤の弁はすでに亡くなっていた。藤の弁は鳥辺山で茶毘に附され、民部卿の行方も知れなくなる。

本資料の場合、上下二段に分かれ、上段（頭書）に注釈、下段に本文。一五丁目の後ろに遊紙を二丁挟み、一六才からは『鳥部山物語』となる。縹色の題簽（八・〇糎×一・八糎）に朱書で「鳥部山物語」とあり、本文冒頭に貼付されている。

また本資料の最初の遊紙は、ほかの料紙に比べて背が低く（二六・五糎）、後補と考えられる。右肩に「書籍館印」が捺され、中央に校訂・注釈を書き込んだふせん（二五・〇糎×六・二糎）が貼付されている。

本文冒頭（二才）には「和学講談所」の蔵書印あり。また「尚書亭」（二・〇糎×一・三糎、長方陽刻印）が二才・一六才・三五才の三ヶ所に捺印されている。

#### 【書誌】

外題・「まつほ／鳥部山／物かたり」左肩四周単辺（朱）刷題簽（一八・七糎×三・五糎）に墨書

内題・「松帆物語」「鳥部山物語」

表紙・香色表紙（二七・〇糎×一九・〇糎）

遊紙・「書籍館印」（右肩、ふせん（二五・〇糎×六・二糎）あり扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文每半葉二三行

字面高さ・上段八・〇糎、下段一八・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・三五丁

印記・遊紙（一才）「書籍館印」

二才「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「和学講談所」

「尚書亭」（二・〇糎×一・三糎、長方陽刻印）

一六才「尚書亭」

三五才「内閣文庫」「尚書亭」

#### 【写年・書写者】

本資料に奥書はなく、写年・書写者に関しては不明。

【二一九】嵯峨物語 写年不明 一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇七七」

本資料は室町物語『嵯峨物語』の写本で、特に国学者の伴直方の手校本として知られる写本である。一冊。袋綴。

『嵯峨物語』もまた前掲資料同様に、美しい稚児との恋を描いた「稚児物語」に分類されるもののひとつ。美貌と才に優れた稚児松寿君とそれを見初めた一条郎の出会いとすれ違いを描いている。先行する「稚児物語」である『秋夜長物語』や『松帆の浦物語』の影響を大きく受けているが、死別など悲劇的な結末の多い稚児物語の中ではめずらしく幸運な結末となる。また『季娃物語』と内容が近似している点も早くから指摘されており、前後関係ははっきりしないものの影響関係がうかがえる。

本資料には序文がなく、略本系に分類される写本である。（序文を持つものは広本系に分類する。）

本資料の一才右下には「伴氏家記」「好問堂」の印がある。それぞれ和学者の伴直方と山崎美成の蔵書印である。朱書による校合は伴直方のものと推定されている。「伴氏家記」印が「好問堂」印を避けるように捺してある点から見て、まず山崎美成の手にあつた本資料が、伴直方の所蔵となり、校合が行われたと推定する。

末尾の一五才には「元治甲子」印があり、また表紙にも「昌平坂学問所」の墨印があることから、元治元年に昌平坂学問所の所蔵となったことがわかる。

【書誌】

外題・「嵯峨物語」左肩打付墨書

内題・「嵯峨物語」

表紙・縹色布目型押表紙（二六・五糎×一七・七糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文每半葉二一行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・一五丁

印記・表紙右肩「昌平坂学問所」（墨印）

一才「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「伴氏家記」

「好問堂」

一五才「昌平坂学問所」（墨印）「内閣文庫」「元治元年」

【写年・書写者】

一五才には次の通り、奥書がある。

「右嵯峨物語二卷百華庵所蔵也因松本生而借鈔写／安永戊戌歳後七月十三日南畝主人誌」

百華庵は歌人の萩原宗固を指すと考えられる。宗固は冷泉為村に師事した歌人だが、多くの写本を作成したことで知られる。この奥書によれば、安永七年閏七月十三日、大田南畝が松本氏（未詳）を介して、宗固所蔵の『嵯峨物語』を書写したということになる。なお、南畝が編纂した『児物語部類』には、本資料とほぼ同文の識語がある。

しかし本資料の筆跡からみて、南畝自筆とは考えにくい。『児物語部類』との前後関係もはっきりしないため、はっきりした写年は不明である。

【二一〇】「嵯峨物語」 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇七八」

本資料は前掲資料と同じ『嵯峨物語』の写本だが、序文を持つことによつて広本系に分類される一冊。袋綴。

『嵯峨物語』は序文の有無によつて広本系・略本系に分類されるが、それに従えば本資料は広本系であり、一般的に「広本系内閣文庫本」の呼称で知られている。(これに対し、前掲資料(請求番号：二〇四・〇〇七七)は「略本系内閣文庫本」または「安永七年写本」)

一才に「和学講談所」の蔵書印があることから、和学講談所の旧蔵であることがわかるが、それ以前の来歴は不明。前掲資料とは筆跡も大きく異なっており、関係性は考えにくい。

外題は左肩に朱で打付書。

【書誌】

外題・「嵯峨物語 全」左肩打付朱書

内題・なし

表紙・栗皮表紙(二七・〇糎×一九・〇糎)

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文每半葉九行

字面高さ・二二・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・三三丁

印記・一才「書籍館印」「内閣文庫」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政

府図書

三三才「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者については不明。

【二二一】けんむ物語 寛文八年写 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇六九」

本資料は一般的に『幻夢物語』(または「源夢発心絵」「源夢絵詞」「夜嵐」)の書名で知られる室町物語のひとつで、「稚児物語」に分類されるもの。一冊。袋綴。

京の大原の僧である幻夢は、雪の比叡山で出会った花若丸と心を寄せ、連歌に遊ぶ。しかし、日光で再会した花若丸は具足姿の亡霊となっていた。

のち幻夢は、花若丸が父の敵討ちの末に死んだことを知る。そして奇しくも幻夢は、花若丸を討つて出家した武者と出会い、ともに信仰を深くして往生を遂げた。

稚児との悲恋、やがてそれが発心となっていく点など、稚児物語に特徴的な要素を兼ね備えているが、連歌や敵討ちなど室町時代の時勢を反映した内容となっている。

『実隆公記』文明一七年正月一四日、二六日条に本書に関する記述が見られ、三条西実隆を作者と見る向きもある。したがって成立は文明一七年以前と推定されている。

本資料は、一才に「和学講談所」の蔵書印が見られることから、和学講談所の旧蔵ということがわかるが、それ以前の来歴については不明。

【書誌】

外題・「けんむ物語」左肩四周双边刷題簽（二四・二糎×三・二糎）  
内題・「けんむ物語」

表紙・横刷毛目表紙（二三・五糎×一七・〇糎）

見返し・以下の通り墨書あり。「ケンム物語寛文四年ノ板行世ニ流布スノ板本跋ニノ于時寛文四甲辰歳 正月吉日 松長伊右衛門開板ノトアリ疑ラクハコノ本板本ヲ以テ写ス可考」

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・四四丁

印記・一才「書籍館印」「内閣文庫」「浅草文庫」「和学講談所」

「日本政府図書」

四四ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

四四ウの奥書は以下の通り。

「寛文八歳ノ申五月三日 書之」

【二三〇】「辨草紙」 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇七」

本資料は一般的に『弁の草紙』の書名で知られる室町物語のひとつで、「稚児物語」に分類されるもの。一冊。

日光山の美しい稚児弁公と彼に恋慕した大輔公の物語。二人は一度は結ばれるものの、まもなく大輔公は病死し、これを知った弁公も病篤くなりやがて没する。ある人の夢のお告げに、弁公は実は鹿島のみかくれの明神の化身だったと現れる。

稚児をめぐる恋愛模様と、悲劇的な別れ、そして稚児を神の化身とする本地物の要素など、典型的な「稚児物語」の特徴を備えている。ただし、本書の最も特徴的な点は、弁公をはじめとして、登場人物がほぼ日光山に実在した人物である点である。日光山の古記録によれば、弁公は天正一〇年六月一四日に没している。さらに本書の作者は、作中に登場し、弁公たちを供養する真鏡坊昌證と考えられている。本書が物語の起伏に乏しいのは、事実をもとに記されたためだろう。

本資料の場合、内題を欠き、目録名は外題に基づく。扉中央には「弁の草紙」と墨書あり。

本資料の本文冒頭に「和学講談所」の蔵書印が確認できるが、それ以前の来歴についてははっきりしない。

【書誌】

外題・「辨草紙」左肩無地料紙題簽（二六・〇糎×三・五糎）

内題・なし

表紙・香色布目型押表紙（二四・〇糎×一六・〇糎）

遊紙・なし

扉・中央に墨書「弁の草紙」

料紙・楮紙

行数・本文每半葉六行

字面高さ・一九・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・四四丁

印記・一才「書籍館印」「内閣文庫」「浅草文庫」「和学講談所」「日

本政府図書

一三ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料「一三ウ」には「元禄乙亥三月大日」の年記を持つ奥書がある。元禄八年のものだが、日光山輪王寺にはこれと同じ奥書を持つ写本がある。本資料は元禄八年本からの転写と推定され、筆跡から推定するに、江戸時代中期以降か。

(調査員)